

編集室から

熊本地震から半年が経とうとしている頃、今度は阿蘇山が噴火しました。震災から復興途上だった地域を火山灰と、宿泊キャンセルの波が押し寄せたといいます。阿蘇・別府地域を含む再度の被災地からの報道に、なんともやるせない気持ちになりました。

その後、続報が届いていないことから、阿蘇山は落ち着きを取り戻しているのではないかと、拝察しています。折角開通した道路が再び閉鎖され、復興に取り組む地域の応援にと想いを寄せた観光客の方々の足を止めることが、長くは続かないよう、祈るばかりです。

来月11月は、熊本全県地域で全国地域づくり研修交流会熊本大会が開催されます。及ばずながら、私も参加させて頂きませんが、そこへの参加で、現地の方々との想いを交わし、幾ばくかの励ましの一端にでもなれればと思っています。

先日、参加が決まった分科会会場の人吉の知人にお電話を差し上げたところ、人吉はほとんど被災らしきものがなく有難いとのことでした。より大きく被災した地域の復興支援に出かけているそうです。このお話を伺って、東北大地震の際、内陸部で被災を免れた(但し、古い市役所だけ被災したそうですが)遠野が、複数の沿岸部に等しく約1時間で透徹できる地の利から、ずっと後方支援基地としての役割を果たし続けておられたことを思い出しました。

被災地に隣接する地域では、放っておけない!と、持続的な被災地支援の前線基地であり続ける姿はまた、尊いと存じます。

さまざまな自然災害が、いつ発生しても不思議ではないこの国で、常の備えだけが、被災地となっても被害を最小化するため、隣接地となり支援基地の役割を果たすため、そのいずれのためにも、欠かせないと思います。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆
していただいている川畠さん
が「能登の夜市」の姉妹店を
開店されました。

上京された際、ご利用になっ
てみてください。

もちろん、川畠さんご自身も
お店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3

ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術
者を育てることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、
計画マンがどのようなことを考えているのか
などに触れて、少しでも業界を知っていただ
ければと考えて編集しています。

2016/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2016/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

神意月



新旧の車両が行き交う金沢駅
by hama

濱のつぶやき 『当然』

普段、私たちは自分のことを「普通」だと思っている。あるいは、何かを主張したり訴えているとき、自分が伝えようとしている内容は「正しい」と信じている。

特に、日本人であれば「普通」というよりも、もっと平均的な感覚を伴った「ど真ん中」くらいのつもり「普通」のような気がする。それはまた、全く違和感が無いため、「普通」だと思っていることすら気づかない（意識に上らない）ほどの普通さ加減のようだった。

さて、では家族とのやり取りではどうだろう。永年寄り添った伴侶であっても、可愛くて仕方の無い個や孫であっても気に入らない癖の一つや二つはあるだろう。「気に入らない」とはつまり、違和感のことだし、それは「自分の普通と異なる」ことを感じたという証拠でもある。相手は「普通」だから自然とその癖をやり続けている訳だし、こちらは「普通ではない」から気に入らない訳だ。

この点だけみても、鋭い人は「自分の普通」がいささか怪しいことに気づく。

親しい友人の家庭に招かれて、そのご家庭の様子に触れて、驚いた経験は一つや二つあるだろう。何故、驚くのだろうか。それは、自分の家庭の「普通」が、相手の家庭では全く普通ではなく、相手の家庭の「普通」が、こちらにとっては「驚きに値するほど違う」からだ。

この点だけみても、鋭い人は「自分の家庭の普通」がいささか怪しいことに気づく。

海外旅行は、刺激的な体験・出逢いの連続だ。何をしても、何を食べても、全てが「普通の暮らし」と違う。だから、一度はまると病み付きになる。帰国の機中で早くも次の渡航の構想を練っている人もいる。この「刺激的な体験」は何故可能なのだろうか。それは、海外の「日常の普通」が、日本の「日常の普通」とは大きく異なるからだ。両者が違うほど、刺激も大きくなる比例関係にある。

何も海外にまで出かけなくとも、来日している外国の人々との交流の場に参加すれば、やはり同様の刺激を受けられる。外国人から見た日本人の「変さ加減」を述べ合う番組が成立しているのも、互いの普通の楽しい衝突がネタとして受け入れられたからだろう。

自分の普通と他人の普通の違いが、楽しいコミュニケーションのネタになっている間は平和である。

ところで、この「普通」の感覚の中に、「正さ」も含まれている事が事態を複雑にしている。

「正さ」の主張は今日、とても正統であって、犯しがたいほど大切であると社会的に認知されているかのようなバッシング、叩きが横行してしまいか。

普段、意識にも上らないほど「普通」だと捉えていることの中に、ある種の「正さ」が潜んでいると、そ

の正しさは意識的に検証されないまま、「当然のように正しい」ものとして扱われている。従って、その「当然のように正しい」ことに反する出来事・言動は、当然正しくは無いから、「当然のように激しく非難・糾弾」されることとなる。誰かを非難・教壇している人を観察していると、「我が主張は当然正しい」という大前提に立っているから、一歩も引こうとしないのは、ある意味自然である。

問題は、こうした「当然の正しさ」同士が正面からガツブリ四つで衝突したときである。

個人同士なら激論の果てに喧嘩沙汰に、集団や組織同士なら訴訟に、国家同士なら国交断絶から戦争に、それぞれ至る道のりのスタート地点に立つことになりはしまいか。

果ては殺し合いになるのであれば、その道のり自体、果たして本当に「正しい」のだろうか？

「自分は正しい。相手が間違い・誤りだ」という一方通行の思考を双方が一歩も譲らなければ、当然正面衝突は避けられまい。では、何故この「二つの正しさ」が並存しているのだろうか。心底ほんとうに正しいのであれば、相容れない正しさが並存するだろうか。このこと自体が「正さ」の矛盾を表してはいないだろうか。

数学や物理学、天文学などの自然科学の領域では、正しさが成立するのは、一定の条件の中だけであると理解されている。ニュートンの運動力学は、間違いであった、アインシュタインの相対性理論が完璧に正しいのではない。

現在でも、光よりも相当程度遅い速度の世界では古典力学は正しい（誤差が無視できるから、方程式は、実用上成立すると考えてよい）とされている。

そして現在、最高に正しいはずの相対性理論も世界中の科学者からの冷徹な理論構築・研究・実験を通じて、日々「本当に正しいのか」検証されつつけていて、いつ世紀の大発見によってその「今のところ最高に正しい」地位から、「この条件範囲の中なら正しい」レベルに陥るかは判らない。

科学の世界では、このように「正しさは限定的である」。前提に立っているが故に、新しい正しさの証明は、「勝利と敗北」ではなく、「進化」であると捉えられている。

ステレオタイプな思考の無間ループから、抜け出さない事には、解決・進化の糸口すら見つからない。

不思議なことに人間は、人に教えられただけでは治らないものがある。自らハタと「自分のことだ！」と気づき、大いに恥じ入るか、深く納得してからではないと、改心に芯が通らないようなのだ。

何よりも、この自分自身がそつである。科学的思考を保ち続けたいと願っているにも関わらず、気がつけば自分だけの小さな正しさを「普通」な感覚で取り扱っている。

気づかないとは、如何に怖ろしい事か…。くわばら。くわばら。

このゲームを経済学っぽく見ていくと、これまでにない収益構造が見えてくる。まず専用のハードは不要でありアプリも無料。ゲームを早く有利に進めるための道具等の入手に課金。ここまではよくあるスマホゲームと同様であり、違う点はプレイヤーの生活行動に影響を与えていることと関係がある。

ゲーム上の特別な場所として、必要な道具を無料で入手できる場所、モンスターが高い確率で湧き出る場所、他のプレイヤーのポケモンとバトルする場所がある。ポケストップやジム、レアポケモンの巣がそれに当たる。これらは景勝地、神社仏閣や公共施設等へと勝手に設定されているが、一つだけ例外がある。ゲーム配信と同時に、日本マクドナルドの全2,900店舗のうち2,500店舗がポケストップに、400店舗がジムに設定されたのである。同社は、Niantic社¹と(株)ポケモンとの間で、単独ローンチパートナーシップを締結している。

マック側の狙いは言うまでもなく集客効果である。実際、配信開始された7月と翌8月の既存店売上高は、前年同月比26.6%増、同15.9%増となった。他の要因もあるとは言え²、一定の効果を生じたことは間違いないであろう。

ところで、同社の広告宣伝費は年間約60億円であり、販管費252億円の23.7%、売上高1,895億円の3.2%を占めている³。同社に限らず、巨額の広告宣伝費をかけ、マスメディア等を通じてブランドイメージを構築し、集客を図るというモデルが長らくマーケットを支配していた。急激に浸透してきたネット広告は、マスメディアにネットメディアが割り込んだに過ぎない。ところがこのゲームは、地図情報を直接的に広告空間として事実上活用するため、Googleマップさえあればメディアや広告業界を理論的には必要としない。詳細は不明だが、少なくともこのメディアを介さない広告手法は、“安上がりかつターゲットにダイレクトに届きしかもその効果を計測しやすい”というメリットが生じるのではなかろうか。

前置きが長くなったが、ポケモンGOの収益構造の一番の特徴は、特別な場所の設定によって、広告宣伝費をゲットする仕組みを内在していることである。果たしてマック側は、どのくらいの額をポケモン側に支払っているのだろうか。そしてポケモン側は日本においてマック以外への展開をどのように考えているのであろうか。多店舗での様々な類型によるデータが得られるマックは、ポケモン側にとってデータを蓄積するのに好都合だったと思われる。

プテラは最近ゲットしたものの、まだカビゴンに出会ってすらいない私。レアポケモンの巣の値付けはいくらぐらいになるのだろうか？

注1:本社はカリフォルニア州。Googleからのスピンアウトで非上場。任天堂も出資

注2:期間限定商品の投入や、2014年7月の「中国製期限切れチキンナゲット販売」および2015年2月の「異物混入事件」等による客離れがようやく一巡した結果でもある

注3:日本マクドナルドホールディングス「平成27年12月期決算短信(連結)」

今年も早10月となり、2016年もあと3か月弱となりました。そして私も先月で齡44といいい大人の年齢になっているわけですが、まだまだ幼稚さが抜けずwife(大隅教授へのオマージュ)から子供と一緒に怒られる毎日です。

さて先日子供達を通う保育園の運動会に参加してまいりました。この時期は保育園から中学、高校までどこもかしこも運動会や体育祭が真っ盛りです。昔は俊足でならした私も昔とったなんちゃらで、親子競技なんかに参加はしてみのですが『はやる気持ちに足追い付かず』。。。ですが、古いも若きもやはり運動会というのは、盛り上がり血が騒ぐものなんですね。特にリレーなんか、親であることも忘れてコース近くまで出て腕をぶんぶん回しているオヤジが数人いました(笑)。

そういえば、私の故郷石川県能登町(現在は能登町)宇出津には、毎年10月10日に町内対抗の運動会がありました。当時は約50町内が約30種類の競技に対して付与されるポイントをもとに順位を競うというものです。障害物競争あり、パン食い競争あり、大玉ころがし等々お約束、伝統的な運動会コンテンツがてんこ盛りの大イベントです。そしてここでもクライマックスで盛り上がるのが小学生(女) 小学生(男) 中学生(女) 中学生(男) 高校生(女) 高校生(男) 成人(女) 成人(男)の順でバトンが繋がる町内対抗リレーです。当時うちの親父の足の速さが誇らしげに思ったり、友達の町内のブルーシートに遊びに行っただけはお菓子ももらったり、町内の人たちがそれぞれ手作りのお弁当を持ち合い、子供はジュース、大人は酒を飲んでワイワイ楽しんでいる様子子供ながら素敵な光景でした。子供ながら宇出津というひとつの地域が運動会を通してひとつになっていた気がしましたし、大人になったら当たり前のようにここでリレーのアンカーとして走るもんだと思っていました。しかし残念ながら少子化によって私が高校生になるころにはこの運動会も開催されなくなってしまったのです。。。

さてここから地域づくりの話に変わりますが、魅力ある地域づくり=人づくりと言われますが、人づくりは=人間関係づくり=友達づくりであります。近年、都市部では祭りへの参加者が減り続けており地域内での人間関係づくりなんてものはほぼ皆無に等しい状況にあります。かくいう私も子供を通じてしか地域との関わりがないのが事実です。本当は今住んでいる地域の活動に参加したいと思いつつも、そのきっかけとなるコトがないのです。そこで例えば『運動会』というコンテンツを地域内でのコミュニティツールとして見直してみてもどうでしょうか？

(1)主催~企画~運営

スタートアップ時の主体はやはり市や区の自治体になると思いますが、ゆくゆくは近隣の自治会のPJチームやNPOなどに業務移管するながれでしょう。運営に関しては既にマニュアル化されネット上で公開されているものもあるので問題ないかと。

(2)施設：市立・区立の小中学校のグラウンドが適切。

(3)資金

住民からの徴収や住民税の一部を適用というのは難しいという議論もあるかもしれませんが。その場合財源としては 地元企業との提携、ファミリー層をターゲットとした企業の協賛クラウドファンディングを活用。地元住民へのPRも兼ねて。

(4)参加者集め

参加者が集まらないと盛り上がりがないので、この問題が最も難しいかもしれません。

- ・まずは、域内の保育園、小学校、中学校の子供達や保護者中心にアプローチ
- ・単身者向けには地域内の飲食店やコンビニなどをメディアとして活用

居住している方だけでなく、地域内で商売や会社勤務している人も参加も可としてもいいかもしれません。

やはりスポーツって様々な垣根を越えて盛り上がりやすく、知らない人同士が仲よくなりますし、何より私としては親が子供にかっこいい姿(もしくは無様な姿)を見せて、憧れて(もしくは幻滅する)くれますので、そんなイベントがほしいなあ。と感じた今日この頃でした。

『富士の国から ~大魔神のたび~』 かなつ星IN九州ファーストゲスト同窓会
2016.6.24 静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

会食会場に行くとそこにはかなつ星のクルーの仲さん、小川さん、川内谷さん、長友さんが待っていてくれた。「え！会食もお付き合いいただけるのか」唐池会長だけだと思っていただけに、皆も大喜びだった。

セブンスターズの乾杯の掛け声の前に唐池会長の挨拶があった。「ここにお集まりの皆さまはかなつ星のスタートの記念すべき他のお客さんには言っていないがJR九州にとって最も大切なお客さんです。っ



て実は毎回言っているんですが(笑)2013年10月15日、準備万端で臨んだとき、クルーの皆はやりとげた安ど感と不安が織り交ざっていました。お客様自身がかなつ星を盛り上げ、クルーにサービスをしていただいたものと思っています。かなつ星はお客様に支えられて日本サービス大賞を6月13日に阿部首相から直々にいただいた。熊本地震からの立ちあがりのこと、地方創生、日本おもてなしの手本のようなものとも言ってもらえました。この場で披露できることがとても嬉しいことです。」

そして「セブンスターズ」、皆の杯が高々と上げられかなつ星の日本サービス大賞の受賞を大いに祝った。皆にスピーチを回したら、当日からその後に起こったかなつ星にまつわるお話をされた。JR九州提供のお酒に加え、小生も町長から持たせていただいた磯自慢の大吟醸を皆に召し上がっていただくことができた。



宴もたけなわ、いったん会食の会場を閉じ、玉の湯の談話室に移動になった。そこにとてつもないサプライズが待っていた。かなつ星の

中で生演奏をしてくれていたバイオリニストの大迫さんとピアニストの伝さんが待っているではないか！演奏の準備は整っていた。



酒に赤らんだ顔がさらに上気した。そして演奏してくれる曲が、かなつ星の中で個々がリクエストした曲なのだ。なんと、その時の記録が残されているのか！サプライズが怒涛のように押し寄せてくる。演じてくれた曲は斉藤和義の「歌うたいのバラッド」、その時の場面が記憶の奥から湧き上がってくる。頬を拭わなくてはならないほどだけど、流れるに任せていた。この日はラウンジ金星から玉の湯にまでかなつ星流の気に入ったおもてなしに感動されっぱなしだった。そして、とどめは自宅に届いた会長からのお手紙と贈り物だった。



皆は僕に言った「また、来年もやって欲しい」って。かなつ星のクルーの皆さんが「もう、勘弁してー」なんて思われなようなタイミングを見計らってやりましょうか？いやいや、次回は私たちがクルーの皆様をもてなさなくてはね。と思わずにはおられなかった。

(おしまい)



「かなつ星」公式ページより